

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470700713		
法人名	有限会社ころ		
事業所名	グループホームころ		
所在地	三重県松阪市八重田町485-2		
自己評価作成日	令和元年6月5日	評価結果市町提出日	令和元年8月13日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kajigokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JigvosyoCd=2470700713-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和元年7月2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者の重度化により、その人の状態に合わせて外気浴、散歩に出たり、入浴も介護度が重い人も入れるように機械浴を導入し、浴槽に気持ちよく入浴してもらっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設より15年経過する事業所で、隣接するデイサービスと住宅型有料老人ホームが併設されており、地域におけるケアの拠点としての機能をしている。医療面での体制では、常勤看護師配置による24時間医療連携の支援が整っている。豊富な看取り経験の実績が有り、利用者・家族の希望も多く、昨年は3名、本年は現在迄に3名の看取りを行なった。今後も協力医の24時間医療連携のもと、利用者・家族の希望に添えるよう最期までの支援を目指し、体制を整えて取り組んでいる。長年の介護経験を持つベテラン職員にも恵まれ、開設時より職員の定着が良く、離職率の低い事業所である。利用者の重度化に伴う職員の腰痛緩和やストレスの無い介護を検討し、本年4月には介護用入浴機器の導入となった。利用者には安心安全で気持ち良い入浴の楽しみを、職員は意欲向上へと繋がっている。利用者と職員と一緒に歌詞を読みながら、皆んなで歌う事が日課となっており、日々利用者の活性化に繋がる取り組みを続けている事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当社の理念である「その人らしい生き方を尊重する」を基にして、月1度のカンファレンス、各申し送り等、又は随時の話し合いで個々の介護の実践に繋げている。	事業所理念を基に職員は、利用者個々のどんな場面でも気付きや変化を互いに話し合う事を意識して取組んでいる。今年度はさらに困難事例の対応と介護技術の向上を目標と定め、理念の実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会員として夏祭り等の行事に参加したり、地域からのボランティアとも交流している。	地域の夏祭りには、利用者の体調管理を気遣いながら、参加し楽しんで貰っている。かき氷屋台では地域の方々と職員が、共に催しの中で交流が出来る。隣接デイサービスよりイベントの招きがあると、利用者は参加を楽しみに交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	月に1回、認知症カフェを開き、介護者の癒しの場を作ったり、職員が認知症研修会の講師として、地域に出向いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では、活動報告や症例報告、ヒヤリハット、事故事例も報告、委員の要望で講演会も行った。	会議は今年度6回開催され、活動報告・事例報告が明確にされている。参加メンバーからの活発な意見交換・助言・情報提供は有効的に捉え、サービスの向上に活かしている。	事業所開設後15年経過し、今年度を振り返りの良い区切りとして捉え、今活動出来る事を探り、掘り起こす良い機会とする事に期待する。また認知症カフェを地域へ向けてもっと知って貰う為、更なるアピールをして行くを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	制度改正に関する相談や助言をもらったり、市のグループホーム部会に於いて情報交換をしたりして、他のグループホームとの協力関係を築いている	前年度の法改正により、市の窓口へ何度も往復して、書類説明や解説を受けた。また、松阪市主催グループホーム部会には2ヶ月に1度参加し、会議の内容を持ち帰り、事業所のサービス向上に繋げている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアの勉強会を年2回、委員会も4月から開始し、勉強会を年に2回開催し、全職員の共通認識として意識づけをした	身体拘束や虐待については、カンファレンスの中で勉強会の場を作り、知識の向上と防止に努めている。大半の利用者は身体介助が必要であり、職員間で声掛け2人介助を基本とし、互いに尊重し合える健全な介助を目指して実行している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待に関する研修を、社外、社内で学ぶ機会を持ち、事例等を通して、虐待は犯罪であるという事も意識づけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社内、社外研修にて、権利擁護に関する制度の研修に出向いたりして、必要性があれば活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をかけて入居契約時には、十分な説明を行い、又、介護保険改正時には、書面をもって十分な説明をして理解を得ている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時には日頃の様子を詳しく説明し、家族の意見、要望も聞き出している。また要望箱も玄関に設置している。	家族からの要望や小さな意見も、速やかに伝達票に記入し、全職員が読み、チェック・実行が出来る仕組みで、スムーズに稼働出来る様に改善された。家族からの声が、聴きやすくなる様取り組みが継続されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスや随時の話し合いで情報共有し、提案があれば試行し、工夫して先に進めている	利用者の重度化により、一般浴室での職員の腰痛やストレス面が改善検討され、介護用入浴機器設置により浴室が改造された。四月から稼働開始となり、利用者も職員も安全に優しい入浴となった。日常でも職員がホーム長や管理者に気軽に意見・要望が話せる場面が自然に持っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格や経験、実績を考慮して個々のやりがいに繋がるように努め、向上心が持てるように職場の環境整備もしている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新入職員や経験の浅い職員には、日常的に指導している。研修の機会は内外に求め、出来るだけ多くの職員が参加できるように考慮している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県と市の同業者の協議会に於いて、研修や活動を通じて交流し、学びあう機会をもっている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	見学や体験を行ったうえで入居し、生活に慣れるまでは、環境の変化を考慮し細かく気配りをしながら信頼関係を築く努力をしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の不安や困りごとを十分に聞き、連絡を密にとり信頼関係を作り上げていく		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームでは完結型の介護の仕方をしているので、必要とされることをホームに於いて多用途に工夫をしている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の主体性を重んじ、その時できることで張り合いが生まれるような生活を組み立てる		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の情報は家族と職員が共有し、共に支えていく姿勢で支援している		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人の面会や外出、傾聴ボランティア等の受け入れで、なじみの関係が続くようにしている。外出が困難になった場合、故郷の話しや昔の思い出などで回想法も実践している	入居当初からの馴染みの関係継続は難しくなってきたが、家族の協力で外出や外食が可能な利用者は支援している。また、傾聴ボランティアの受け入れや、個々のその人に合った関わりの関係継続の支援に力を入れている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎日、午前中は皆が集まってレクリエーションをしている。午後も居室にこもることのないように声かけをし、その人にあった関わりをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	病院入院時は、一旦退去となるが、毎日職員が見舞いに行き、馴染みの関係が続くようにしている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思疎通が困難な方の思いの把握は、家族の情報も参考にして推しはかっている。又、側に寄り添うことで気持ちが伝わることもある	重度化により本人の思いや意向の把握は難しくなっているが、職員は利用者一人ひとりの日々の表情や反応に関心を払い、情報共有しケアに繋げている。また職員同士が意見を出し合う事も大切だと、利用者の表情や反応を熱心に話し合っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	意思表示が困難により、思いの把握は難しい。家族の要望もふまえ、安全で穏やかな生活になるように努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの身体状態、精神状態を把握し、ケアプランに沿って、その日の暮らし方を支援している		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネがケアプランを作成し、カンファレンスで、介護の方法や現状を職員全員で話し合いモニタリングをしている。家族からの意見も聞きつつ皆で共有して計画を作る	介護計画は3ヶ月に1度見直し、作成をしている。看護介護記録には課題へのケアの気付きから介護計画見直しに至る記録が、職員の誰もが分かる様にファイリングされている。家族の要望・説明等記録も整備されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録は気づきや工夫を客観的に詳しく記入し、職員間の情報共有に役立っている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟に対応し、突発的に起こる不穏症状など、日々の変化に応じて画一的な支援にとられないように取り組んでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	安全で穏やかな生活でできるよう、地域の民生委員やボランティアなどの支援を受けられるように心がけている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医を継続する方、当方の協力医をかかりつけ医とする方、どちらも看護師が日頃の様子を報告し、適切な医療に繋がっている。	協力医より月一回の訪問診療や往診を全員が受けている。常勤看護師による日常の体調管理や24時間医療連携が可能であることが、利用者・家族の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常でとらえた気づきなどは、看護師に相談している。常勤看護師が、日常の健康管理と看護業務を行い、24時間体制で医師との連絡もとっている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	毎日職員が病院に出かけ、馴染みの関係が途切れないようにしている。病院のケースワーカーとの連携も行っている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期が近づけば、家族、主治医と話し合いを重ね乍希望者には看取り介護を行っている。看護師の24時間体制で、家族、医師と連携をとっている	昨年は3名、今年も3名の利用者が家族の協力を得て、協力医と職員チームにより、安心して納得して貰える最期を看取る事が出来た。看取り後の振り返りや家族アンケートからも、感謝の声が寄せられた。事業所・全職員が終末期迄の支援の思いを共有し、取り組みに努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者個々の、事故発生リスクは常より把握して、職員が共有し、事故防止に努めている。救急法の研修も行っている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月1回定期的に自主的に「夜間想定避難訓練」を実施し、会議で反省点や、改善点を検討している。地域合同消防訓練に参加し、協力体制を築いている。隣接する施設とも合同訓練をしている	年二回消防署立会いの上、防災避難訓練を実施している。また、隣接施設との合同で、夜間想定や地域合同訓練等を毎月実施し、反省点から課題を話し合い、実践的訓練での確認と理解を深めている。備蓄品在庫チェック表が貼られ、準備体制も整えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーを損ねないように個々の認知度を理解して介護する時の声かけ排泄誘導などには、配慮している。利用者同士に混乱が生じないように、食卓の位置を変えて、双方の尊厳を保つ工夫もする	職員同士の私語を慎む事、排泄支援中の声掛けへの配慮等、特に注意を払う様に取り組んでいる。利用者同士の尊厳を保つ工夫を話し合い、食卓席や順番等にも本人本位での暮らしが出来る様に支えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々に寄り添って、思いや希望を引き出せるように話かけ、表情を読み取ったりして自分で決めることができるように働きかけている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のペースを大事にして、画一的な援助にならないように趣味、運動、休憩等を組み立て支援している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の理解度に合わせ、好みの衣類選びをしたり、化粧のアドバイスをしたり、その人らしさが出せるよう支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備を共に出来る人はいないが、食材の下準備や、おぼん拭き、食材を話題にしながら、楽しい雰囲気を作りながら食事介助をしている	食材皮剥きや芽取りの下準備が、利用者の大切な活動のひとつであり、食事への関心を大切にしている。三食とも職員の調理で、音や匂いがリビング内に漂う時間帯がある。食事介助の必要な方が増えている実情より、食事開始時刻を随時早め、見守り強化し、安全に誤嚥なく楽しい食事が出来る様に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量と水分量は記録して、体重も目安にして、食事量や栄養バランスを考えている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは、全員が確実にを行うように支援し、一人ひとりに応じた口腔ケアをして清潔を保っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をつけ、個々の排泄リズムの把握や、言葉かけで、言えない排泄サインを見逃さないように努めている。又、排泄用品は、個々に合ったもの、経済性も考慮して選んでいる	排泄自立者は居ないが、なるべくトイレでの排泄を促し、清潔に暮らして貰う事を支援の基に、排泄チェック表を利用し取り組んでいる。排泄用品は個々の排泄リズムを掴んで、無理や無駄の無い様に支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘にならないよう排泄パターンを理解し、食材を選び、又、運動の工夫などを行っている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	車イスのまま湯に浸かれるタイプの風呂場に改修し、個々の身体の状態に合った入浴を楽しんでもらっている。	個々の身体状況に合った入浴支援の検討より、椅子に腰掛けたままで湯に浸かれる入浴機器設置の風呂場に改修され、4月1日から稼働開始となった。利用者全員が週2～3回、安心安全な入浴を楽しんで貰っており、家族からも大変に好評である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はできるだけ活動的な生活を目指し、昼寝で小休憩し、夜は安眠できるように支援している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師や、薬剤師の指示のもと、看護師と職員が服薬支援を行っている。症状の変化時は、看護師が医師に報告し、指示を受けている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	レクリエーションや趣味活動をすることで、生活にメリハリやがで、楽しみが見つかるよう支援している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外に出る機会は少ないが、天候や体調をみながら、散歩や外気浴をしている。特定の人にかたよらないようにチェック表に記している。家族さんとも外出して、外出支援を行っている。	車椅子利用者が多いので、全員揃って遠方外出が減ってきているが、春には近くの中学校の桜見を、数名ずつ交替で支援している。玄関前は広くて車の往来も殆ど無く、山々の景色を遠目に眺めも良く、散歩や外気浴を楽しんで貰っている。家族の支援で外出される利用者もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	物盗られ妄想のため、他者とトラブルになり家族の依頼で事務所預かりとなっている方も居る		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や友人からの電話は、子機を使って居室で自由に話している。外部へかける支援も行っている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	仕事をしている職員の話し声、テレビや歌声、台所から聞こえる調理の音など、生活感が感じられることが、居心地良い空間となっている	利用者の過ごす時間の長い共有空間は、リビングで、光・色・広がり・音・空気の流れなどの五感刺激が程よく配慮されている。また、広い廊下と昼夜見守り易く見通しの良い居室配置は、利用者に混乱や不安の無い生活空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれに居場所をもてるよう、自室以外に、玄関から外が見える椅子やサンルーム、テレビの前など、思い思いに過ごせる工夫をしている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なじみの家具や置物を持って来てもらっているが、病気の進行と共に歩行器や車イスが必要となり、安全な空間が優先となっている。	入居当時には馴染みの家具や好みの品に囲まれた生活であったが、病気や身体機能の低下等により、安全優先で部屋の環境作りの変化や工夫がされている。家族の理解と協力により、本人の大切な思い出と、気分の混乱が起きない様、温かい雰囲気や置物や飾り物で工夫がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内部は完全バリアフリーで、職員が見守りする際の死角場所は無く、安全な環境づくりに努めている		